THE CITY OF YOKOHAMA

歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第5号

平成2年(1990)12月1日発行

企画編集・発行／横浜市・横浜市歴史的資産調査会
事務局／横浜市都市計画局都市デザイン室内
〒231 横浜市中区港町1-1
TEL 045-671-3470 FAX 045-664-3356

撮影：米山淳一

旧エリスマン邸の再建をよろこぶ

坂本勝比古（千葉大学教授・横浜市歴史的資産調査会顧問兼調査委員）

この度旧エリスマン邸が、8年振りに再建された。かつて山手の127番に建っていたこの住宅は、横浜山手の西洋館のなかで、新しい傾向を示す建築として注目されていた。しかし所有者の都合で取り壊されることとなり心配されたが、横浜市の努力で、元町公園という恵まれた場所に、無事再建されたことは大変喜ばしいことである。

この建物が注目されるのは、幕末から明治、大正期を通じて建てられた多くの外国人住宅が従来から受け継がれてきた様式建築であったのに対して、明らかに新しい方向を示していたからである。それは多くの点で独創的であった。例えば、深い軒の出、外壁2階の下見板張りと1階の竪羽目板張りのコントラスト、ベランダに代るバルコニーやサン・ルーム、1階応接室暖炉や階段室の幾何学模様等に従来の異人館には見られない新しい試みが随所にうかがえるのである。この住宅のデザインによって、横浜山手の洋館は、新しい影響を再び日本の住宅に与えていったともいえよう。

この住宅を設計したのは、チェコ出身の建築家アントニン・レーモンド（1888～1976）であった。彼は大正7年、帝国ホテルの設計者ライトの弟子として、ライトと共に来日した。

しかし、間もなく独立して、積極的な建築活動を開始する。彼は日本のモダニズム（近代主義）の建築家として、最先端を走った人物であったが、同時に日本の木造建築の架構の美しさを真に理解したひとりであった。この住宅は、そのレーモンドが手がけた数多くの住宅のなかで、最初期に建てられた作品としても重要である。

室内はできるだけ、創建当初の姿に近いように復元され、2階には横浜山手の歴史を示すパネルや、この地区の西洋館が写真や図面模型などによって紹介されている。また市民への利用を考えて、今までにはなかった1階休憩室や地階ホール、ラウンジなどが設けられた。

建築主であったエリスマンは、スイスの人で、明治21年来日し、横浜の大きな絹糸貿易商シーベル・ヘグナー商会の支配人として活躍し、昭和15年この地で亡くなったという、横浜にとってゆかりの深い人であった。

国際的な歴史と文化をもつ横浜市の大切な遺産が、このようなかたちで保存活用されるようになったことは、新しい時代への1頁を飾るものとして、その再建に拍手を贈りたいと思う。

エリスマン邸（移築復元工事完成）

現代建築の父と呼ばれるアントニン・レーモンドの設計による。大正15年の竣工。昭和57年マンション建設により取り壊される運命にあったところ、横浜市に部材が寄付された。平成2年6月中区元町公園内に移築復元、建築主の名にちなみ「エリスマン邸」と名付けられ、市民に公開されている。

NEWS

モダニズムを確立したエトランゼの建築家

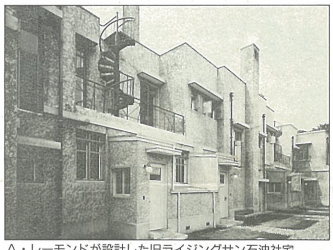
Antonin Ramond
アントニン・レーモンド

ありし日のA・レーモンド

1976年10月25日、アントニン・レーモンドはアメリカで88年の生涯を閉じた。

彼は、エトランゼであるにもかかわらず、40年にも亙って日本で過ごし、日本の建築界に、鉄や鉄筋コンクリートなど当時の新材料を使った近代合理主義建築であるモダニズムを確立した極めて特異な建築家であった。

1919年の大晦日の夜、帝国ホテルを建てるためフランク・ロイド・ライトの助手として、横浜港に上陸したレーモンドが、横浜に建てた建築物は戦前、戦後を合わせて約30。国際貿易港都としての当時の横浜に似つかわしく、大部分が外国人向けの住宅か外資系企業の事務所ビルであり、そのほとんどが1920年代の関東大震災復興期に建てられた。戦前の横浜での主要作品にはユナイテッド・クラブ、スタンダード石油ビル、ライジングサン石油ビルなどがあるが、浜っ子に一番馴染み深いのは、伊勢佐木町のレストラン「不二屋」であろう。横浜の建築物の中で、レーモンド自身にとって思い出深かったものは、ライジングサン石油の一連の建築物のようだ。それらは、彼がその自伝の中で触れている横浜における唯一の作品であり、レーモンドの弟子の一人、三沢浩氏も、機能を重んじ装飾性を排したライジングサン石油


A・レーモンドが設計した旧ライジングサン石油社宅（中区山元町・一部現存）提供＝清水建設

（現、昭和シェル石油）ビルについて、次のようなエピソードを語っている。「エアコンも入り口の回転ドアも多分日本で初めての導入だったろう。わが国の近代的オフィスビルの草分けとしてレーモンドがよく自慢していた」と。

このような先駆的作品が、横浜の地で生まれたのは、戦前の横浜が経済的自立性の高い都市だったからである。それに対して、戦後の横浜でレーモンド作品はソコニー・ハウス（スタンダード石油社宅）など僅か数点あるのみ。だが、エリスマン邸から、1950年代を代表するモダニズムの魅力的な住宅、ソコニー・ハウスまで、山手の丘にもレーモンドの軌跡はくっきりと刻まれている。

レーモンドの許からは多くの優秀な建築家が巣立った。斬新なデザインの神奈川県立図書館、音楽堂を設計して、紅葉ヶ丘を文化の香る地と高めた前川國男もその一人である。彼は若きレーモンドを回想する一文の中で、「事務所を辞める時、退職金なしと言われたので、いままで米国流の高いサラリーではなく日本流の安いサラリーで使われたのだから、せめて日本流に退職金を払うべきだと1週間くらい談判したが駄目だった」と述べている。

そんな逸話が昔話として風化する頃、レーモンドが目指したモダニズム建築もまた日本の日常空間そのものとなってしまった。

（鈴木智恵子・エッセイスト）

12000個の石を保存、再生へ
2号ドック解体工事が終わる

横浜市認定歴史的建造物である旧横浜船渠第2号ドックの解体工事は、平成元年12月着手され、11,996個の石材を撤去して2年6月無事終了した。2号ドックは、帆船日本丸の係留されている1号ドックに先んじて、明治29年12月竣工したわが国現存最古の本格的商船用石造ドックである。

2号ドックの他のドックには見られない特徴は、本渠部の側壁が大きな階段部と小さな雛段部とに2分されていることで、これは2号ドック築造地の支持地盤である土丹層の深さに対応した経済的な設計の結果であった。

また、この解体工事によって、渠壁下部に煉瓦造暗渠が全周にわたって設置され、底盤下部の煉瓦井に接続しているのが確認された。ドックを上方へ押しあげる（アップリフト）ことになる湧水は、土丹層の亀裂に置かれた煉瓦井によって集水され、

解体工事中の2号ドック

煉瓦造暗渠を通して排出される周到な仕組みとなっていた。このアップリフト対策は解体によって初めてシステムの全容が解明されたのである。

解体された2号ドックは、平成5年春完成予定の日本一の超高層ビル（ランドマークタワー）の足元空間としてドライの状態で再建されることになっている。

ショウブ園に茅葺民家が見事な調和

鶴見区馬場の谷あいに、約20,000㎡に及ぶ広大なショウブ園があり、そこに2棟の茅葺民家が残されて横浜とは思えぬ農村的風景を見ることができる。

所有者の話では、この古民家を維持するためには葺き替えのための茅の入手が一番の問題のよう。十数年前までは農園内で茅を作っていたが、現在は業者に頼んでいる。その業者でも、十分な茅の入手は難しいとのこと。生活様式の変化と、都市化の波で茅葺屋根の維持は、経済的にも年々困難になっているが、農園への来訪者に好評のため、同園では何とかこれを残していこうと検討している。

藤本農園は、牡丹、ショウブの季節（4～6月）には、有料で一般にも公開されている。交通機関は、菊名駅から臨港バスで「馬場町」下車。

藤本農園にある古民家

姫小島の復元計画に着手

金沢区の宮川河口は平潟湾に臨み、金沢八景「瀬戸の秋月」と歌われた景勝地であった。この河口中央に存在した姫小島と、上流へ上る潮を止める水門は、昭和39年ころの河川改修により、その姿を消している。今では、その水門礎石が河岸に数石放置され、「照天姫の伝説」が語り継がれるのみである。『新編鎌倉志』には、この島の松を当時の人々が「姥が焼さしの松」と呼んでいたと記載されており、昭和6年に撮影された写真から、この松が見事な枝振りであったことがうかがえる。

本年この宮川河岸が、走川プロムナード計画の対象地でもあることから、地域の要望もあって、景勝を誇った往年のイメージを復元する検討が始まった。また、水門礎石を歴史的な土木資産ととらえて、その仕組みや設置の背景についての調査を同時に開始している。近い将来には、語り継がれる地域の伝説を彷彿させる小さな水辺が出現する予定である。

昭和6年当時の姫小島

旧福沢家別荘が部材保存

古くから金沢区は別荘地として、伊藤博文や日本画家川合玉堂など多くの著名人が住んだところで、現在でもそうした古い別荘の幾つかが残されている。富岡小学校の近くにあった「旧福沢別荘」もその一つ。これは、福沢諭吉の孫、福沢駒吉によって造られたもので、京浜急行京浜富岡駅からおよそ10分、小じんまりとした山林の南向き斜面にあった。

玄関、座敷、茶室等で構成される平屋建の瀟洒な数寄屋風の日本建築と自然を生かした庭園が特徴であり、地元の人たちにはよく知られた存在だったという。

この旧福沢別荘がこのほど開発計画によって、解体・撤去されることになった。神奈川大学西教授によれば、書院造のしっかりとした意匠の座敷まわりを中心に、数寄屋風の縁や茶室など意匠的に優れた建物であるという。

建主福沢駒吉は、諭吉の養子桃助の長男。その母フサは諭吉の次女であり、一時山手の横浜共立女学校に学んだ。駒吉は母のためにこの別荘を建てたと伝えられ、その土地は、慶応義塾卒で、諭吉から直接学んだこともある鹿島源左衛門氏から譲り受けている。戦争中の一時期には皇族の住まいにも使われていたという。

この旧福沢別荘も時代の流れから、宅地開発されることになったが、事業者野村不動産は解体調査のうえ部材を市に譲り、この地に記念碑を建てる計画を進めている。

旧福沢家別荘（昭和40年ころ）

瀬谷の風土、現代に蘇る
長屋門公園に古民家を移築復元

移築予定の古民家

公園内から見た長屋門

明治17年、大岡家の長屋門は建てられた。長屋門は、門の左右に長屋が連結する形式で家格を象徴する民俗建築物である。

建設当初は、現在より厚手の輸入トタン波板で葺かれ、ハイカラなたたずまいを見せていたと思われる。そのつくりの使い勝手の良さから、製糸の仕事場や隠居所、診療所など、折々の生活に対応して改修の手を加えられ現在に至っている。

長屋門は、かつての瀬谷の農村風景を今に伝える歴史的資産としての価値が高く、『大原の里道』と併せて区内のピクニックコースにとりこまれ、地域学習の場のひとつとして、毎年こども達が見学にも訪れている。

現在、背後の竹林や斜面緑地、せせらぎ等を含めて屋敷全体の整備が進められている。今後、古民家の移築や、日本庭園の再生が予定されており、身近な歴史を肌で感じることのできる瀬谷の名所的な公園が、もうすぐ誕生する。

R.H.ブラントン生誕150周年記念事業募金のお知らせ

英国人土木技師リチャード・ヘンリー・ブラントン（1841～1901）は、1868年に来日。その後、1876年に帰国するまでの8年間に、全国に36基の灯台を建設、ここ横浜にも、吉田橋、横浜公園、日本大通り等を設計するなど、横浜の近代的都市づくりに大きく貢献した。

ところが、彼の名前は、数々の業績にもかかわらず、一般にはあまり知られていず、祖国英国にある墓地には墓標さえないという。

来日時のR.H.ブラントン

1991年は、彼の生誕150周年にあたる。この記念事業として、墓地への記念碑寄贈をはじめ、横浜での胸像、記念碑の建設、ブラントン展の開催などが計画されている。ブラトン記念事業実行委員会では、これら記念事業の費用の一部を賄うため、2,000万円を目標として募金を行っている。

募金：一口 1,000円
募金納入期間：平成3年12月31日まで
振込先：横浜銀行本店（店番号200）
　　口座　普通 1113390
　　口座名　ブラントン記念事業実行委員会
問合せ先：実行委員会事務局（横浜商工会議所内）
　　TEL.045-671-7432

歴史的景観都市連絡協議会
奈良市にて開催（9月6日、7日）

まず協議会の趣旨を紹介する。昭和48年、京都市が音頭をとり、歴史的景観を有する全国の市町村が連合してお互いの経験など情報を交換し、併せて歴史的景観保全のために国に対して共通の要望を協議することを目的として開催され、今日に至っている。

本協議会の加盟都市は47市町村。今回は奈良市で開催（9月6～7日）され、18回目を数える。討論の中で発表された倉敷市の報告が目を引いたので、簡単に紹介しておく。

同市では倉敷川畔伝統的建造物群保存地区背景保全条例を施行。この条例は最近、伝建地区周辺に高層建築物の建築計画が出され、それへの対応から考え出されたものである。つまり伝建地区周辺の景観とバランスをとるために、倉敷川畔伝統的建造物群保存地区の背景を守ることを目的に平成2年6月に制定された。背景を守るためには、教育委員会が背景地区を指定し、そこでは13㍍を超える建築物の新築、増築等は、教育委員会と協議し、同意を得ることとしている。これは全国に先駆けて実施されたものである。

このように、まちづくりの情報を積極的に交換しあうことこそ、本協議会の最大の収穫である。

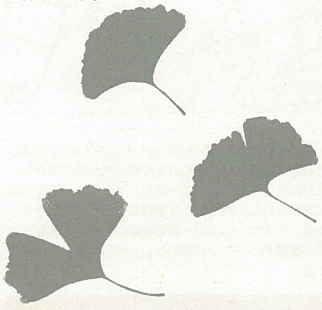
横浜山手聖公会など3棟を追加
――認定歴史的建造物は計8棟に――

横浜市では、市内の歴史的建造物等の保全と活用を図っていくため、昭和63年度から「歴史を生かしたまちづくり要綱」をスタートさせました。また同時に「横浜市文化財保護条例」も定め、2つの制度をあわせて歴史的な資産を守り、将来にわたって適切に保存していくよう、取り組みを行っています。

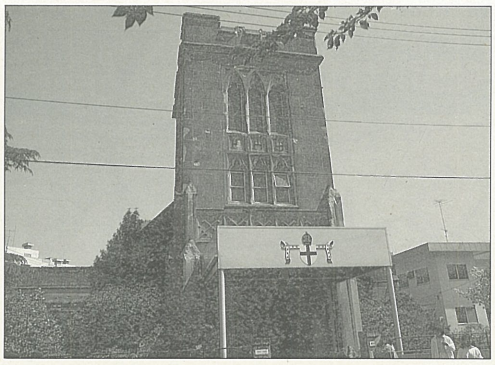
「歴史を生かしたまちづくり要綱」は、横浜市独自の制度として歴史的建造物等の景観保全をめざすものであり、わが国初の事例とも言える「日本火災横浜ビル」の外壁2面の保全計画を適用第1号として認定した実績があります。

要綱は幅広い保全を図っていくため、歴史的建造物の価値に応じて「認定」「保全契約」「登録」の3種類の適用段階を設けています。要綱の対象となる約500棟の所有者に対し、資料の送付やアンケート調査などを実施したり、個別に交渉を進めたりした結果、右表のような成果をあげることができました。

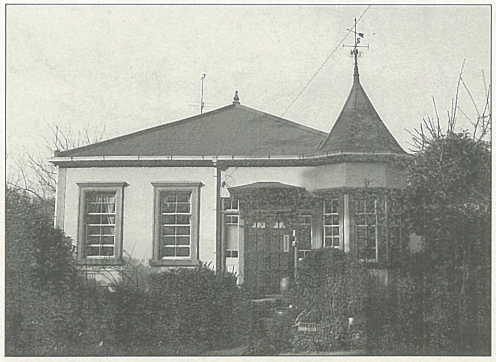
そのうち、前号までに掲載した認定歴史的建造物5棟に加え、平成2年の3月から10月までの間に新しく3棟が加わりましたので、それらの概要を紹介します。



◉横浜山手聖公会
[中区山手町235]

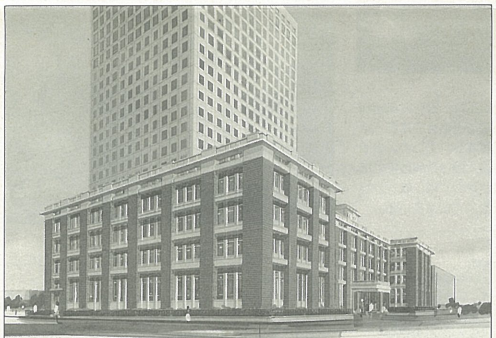


J.H.モーガン設計、昭和6年竣工。山手本通り沿いにあって、連続する歴史的なまちなみを構成する代表的な建造物です。正面の鐘塔はカトリック教会、雙葉学園の塔とともに「山手の三塔」として親しまれているランドマーク（目印となるような建造物等）となっています。大谷石で覆われた外壁は味わい深く、そのデザインはイギリス中世初期の伝統様式を模範としており、ユニークな景観を見せているものです。この建物を将来にわたって維持していくための調査が平成元年度に実施され、市はこれに200万円を助成しました。



◉岩田健夫邸
[中区柏葉]

設計者不祥、大正元年竣工。スウェーデン人スワンソン氏の住宅として建てられ、その後何人かの所有を経て現居住者の所有となりました。かわいらしいヨーロッパの田園風の住宅であり、八角の尖頭屋根には風見がのっています。関東大震災でその殆どが消失した横浜の外国人住宅の中で、今なお健在であるこの住宅は貴重な歴史的資産です。この歴史的な価値をさらに高めていくため、長い年月のなかで改変されたエントツなどの復元や、屋根の補修、建具の調整等を行う計画となっています。市ではその設計に200万円を助成しました。



旧生糸検査所復元予想図

◉横浜第2合同庁舎低層棟（旧生糸検査所）
[中区北仲通5-57]

遠藤於菟設計、大正15年竣工。旧生糸検査所は「キイケン」の愛称をもち、馬車道から万国橋を通じる街なみと共に市民から親しまれていました。旧建物は耐震耐久性に問題があり、長く継続的な使用が困難と判断されたため、万国橋通沿いからの景観保存を図るため、出来る限り創建当初の状態に復元し、新築して再生を図ることとしたものです。震災復興期の建築としては最大規模を誇り、横浜ゆかりの建築家遠藤於菟の晩年最後の本格的作品にあたることでも評価されます。復元される低層棟を含めた合同庁舎は平成6年の完成予定になっています。

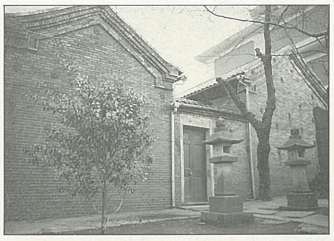
地蔵王廟、イギリス館が市指定文化財に

平成2年度の横浜市指定文化財が、10月20日に開催された横浜市文化財保護審議会（会長、猿田勝美神奈川大学教授）で決定、建造物については、2件が指定物件となりました。以下、この2点について簡単にご紹介します。

◉横浜市イギリス館

旧英国総領事公邸として、昭和12年に上海の大英工部総署の設計によって建築された建物です。建物は、主屋と付属屋とが連結した形で建てられていて、意匠的には、近代主義を基調とした合理性の上にイギリスらしい伝統を加味した穏健重厚なものとなっています。

全体に建築当初の姿をよく留めていて、昭和戦前期の近代建築の特徴を多くそなえています。



◉地蔵王廟

明治25年に、横浜在住の中国人によって建てられた中国様式の霊廟建築。

中庭を中心に建物を前後に並んで取り囲む南方特有の形式で、広東省や台湾の廟建築に多く見られるものです。主要部材は、中国広東省から運び、その他は横浜で調達されました。建築当初、屋根には、フランス人の手により横浜で焼かれたジェラール瓦が使われるなど、国際色を持った横浜らしい建物で市内に現存する近代建築物としては最古の建造物となっています。

認定歴史的建造物リスト

	名称	所在地、所有者	要綱の適用
1	日本火災横浜ビル	中区弁天通5-70 日本火災海上保険㈱	平成元年3月認定
2	横浜指路教会	中区尾上町6-85 宗教法人日本基督教団横浜指路教会	平成元年3月認定
3	カトリック山手教会聖堂	中区山手町44 宗教法人カトリック横浜司教区	平成元年3月認定
4	旧横浜船渠第2号ドック	西区みなとみらい2-2 三菱地所株式会社	平成元年4月認定
5	横浜海岸教会	中区日本大通8 宗教法人日本基督横浜海岸教会	平成元年12月認定
6	横浜山手聖公会	中区山手町235 宗教法人日本聖公会横浜教区	平成2年3月認定
7	岩田健夫邸	中区柏葉 岩田健夫	平成2年3月認定
8	横浜第2合同庁舎（旧生糸検査所）	中区北仲通5-57 国（大蔵省）	平成2年7月認定

第2回横浜アーバンデザイン国際コンペ行われる

第2回横浜アーバンデザイン国際コンペが平成2年1月から6月にかけて行われ、13カ国254点の作品の中から東京の吉野繁氏の"REBORN WARTER FRONT"が最優秀作品に選ばれました。表彰式は6月27日、みなとみらい21地区で開催された「バルセロナ展」会場で行われ、併せて開催された記念シンポジウムには約300人の聴衆が集まりました。

横浜アーバンデザイン国際コンペは、これからの都市のあり方と都市デザインを、実際の都市空間を題材に提案を求めるアイデアコンペで、斬新なアイデアを世界から提案してもらい、これからの横浜の都市づくりに生かそうというもの。デザイン都市横浜の形成を目指す活動のひとつであり成果はヨコハマ国際デザイン展（仮称・平成3年度開催予定）で発表されます。

第2回の今回は、古くから横浜のウォーターフロントとして栄えた海岸通り地区を題材に行われました。海岸通り地区は、当時の面影をしのぶ建築物が残り横浜らしい所として親しまれ、みなとみらい21計画と都市部との接点として新たな再開発が求められている場所です。

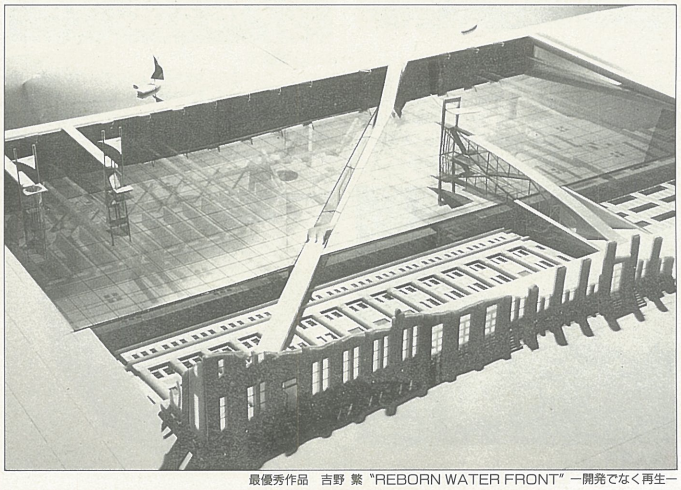
今回の課題は、地区全体のアーバンデザインプランと歴史的に価値ある日本郵船横浜ビルを含む敷地の施設計画でした。

最優秀作品に対し、審査委員長の槇文彦氏（建築家）は「日本郵船ビルのファサードはペーブメントの様におりこまれ、波止場に向かう斜めのアプローチは、次第にあたかも水面に潜って行く印象を与える」とこの作品の素晴らしさを語っていました。

今後、このコンペを契機に、日本郵船横浜ビルを中心とする海岸通りの魅力あるまちづくりに関心が高まるものと期待されます。

日本郵船横浜ビル

空から海岸通り地区周辺を望む



最優秀作品　吉野 繁 "REBORN WATER FRONT" ―開発でなく再生―

横浜山手の歴史と町並

山手は、横浜の歴史を物語る町である。港や市街の眺望、豊かな緑と変化に富んだ町並は、訪れる人を引き付ける。130年程前、開港した横浜にきた居留外国人は、いちはやく山手の優れた環境に目を止めた。ここに山手の歴史が始まる。慶応3年(1867)に、丘陵の樹林地に社寺や田畑が散在する山手を居留外国人に解放するため、幕府は、住宅地としての借地権を競売に付したのである。明治3年には、山手230番地までが確定して、明治10年には山手本通りをはじめとした街路が、そして石垣(ブラフ積み)や石造側溝(ブラフ溝)ができ、その後ガス敷設(明治29年)、電気、水道(明治30年代)もあり、今日見る山手の骨格ができあがっていく。

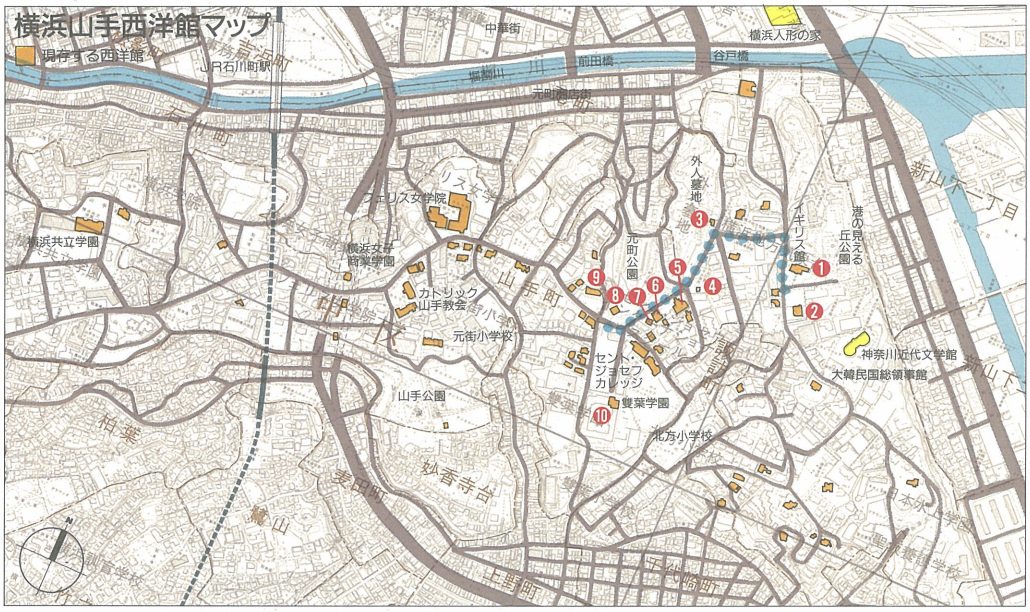
西洋館(居留外国人住宅一異人館)は、欧米諸国がアジア地域で住宅で用いたコロニアルスタイルが明治初期までは多く見られる。吹き放しのベランダが特色である。その後ダイアックやサルダ等居留地建築家が本格的な建設を始め、明治中頃には、ゼールやデラランテ、ワードなどが活躍し、山手には優れた西洋館が建ち並ぶようになった。

しかし、これらすべてが、関東大震災により姿を消し見ることができないのは残念である。ただ、元町公園の「エリスマン邸」横に昭和59年発掘された旧山手80番館の地下室遺構が、当時の洋館建築を物語っている。さて現在残された洋館は、震災復興期に、レーモンド、モーガン、スワガー、ボーリスといった外国人建築家と矢部又吉、宮内初太郎ら日本人建築家の活躍によってつくられたものである。これらは、明治の西洋館のスタイルを引き継ぎながらも、現代の建築に通じる機能的でコンパクトな計画である。

山手に残るこれらの西洋館は、68棟(移築建築を含む)で、すでに60年ほどの歴史を刻んでいる。またそれらが建つ地番が明治初期から今日まで変わらないことからもわかるように、山手の伝統を引き継いだものである。これらを見る時、あわせて山手の歴史を振り返るとさらにそのよさが発見できるであろう。

また、外人墓地、教会、学校などの多くは明治に創設され、ビール工場(麒麟公園周辺)やジェラールのレンガ工場(フランス瓦も製作一現在の元町公園内)、山手公園、ゲーテ座(劇場一現在の岩崎博物館)、外国公館などがあり、海外から文化や教育がいちはやく入ってきた町であることも忘れてはならない。

山手を歩くことは横浜の歴史を歩くことであり、そのゆったりと静かなたたずまいや独特の文化を育んできたこの環境を、保護し充実したものとしていくことが望まれる。

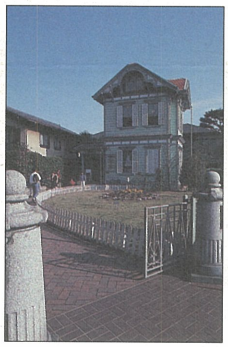


西洋館の紹介

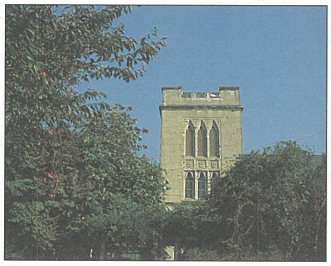
❶イギリス館
山手115番地。昭和12年建築。設計は上海在住の英国人建築家と言われる。もとイギリス総領事公邸であったこの建築は、昭和44年に横浜市が買収し、現在は音楽会や研究会に使われる市民文化施設となっている。広い庭にゆったりと建つ公邸としての格調を伝える。平成2年、横浜市指定文化財となった。

❷山手111番館
大正15年。設計は、J.H.モーガン(アメリカ)で、建主はラフィンという外国人両替商であった。スパニッシュ系のデザインを採用し、正面入り口のポーチは、パーゴラ(藤棚)を兼ねている。また、内部もよく保存されており中央に2階までの吹き抜けをもった居間兼応接間があり、ゆったりとしたプランである。

❸外人墓地
山手92～96番地。居留外国人や船員のための墓地として、元治元年(1864)の「横浜居留地覚書」により区画されたのに始まり、明治10年代には現在の区域となる。横浜で活躍し、また日本の文化芸術技術等に貢献した多くの人が埋葬されている。約4000人。正門は、大正10年の建設と言われ、横浜の歴史を物語る外人墓地にふさわしいものである。



❹山手資料館
山手247番地。明治42年建築。本牧に建築されたが、その後山手諏訪町に移築された。さらに、昭和52年に本多正道氏(故人)の手により移築保存が行われ現在に至っている。山手を中心とした各種の歴史的資料が展示され、一般に公開されている。



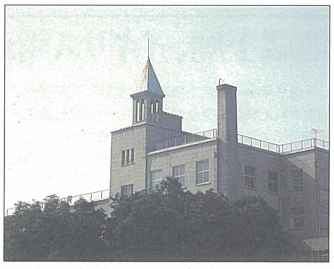
❺山手聖公会
山手235番地。昭和6年建築。J.H.モーガン設計。明治34年に、関内居留地から現在地に移った。その後、関東大震災後復興されたものであるが、英国の城郭建築を想起させるアングロサクソンとノルマン様式を混在させた外観を持っている。また、大谷石を使い重厚なデザインとしている。戦災にもあい、内部を中心に戦後修理がなされているが、よく保存されている。平成2年「横浜市認定歴史的建造物」となる。

❻山手234番館
昭和初期の建築といわれ、設計施工は、宮内建築事務所である。この奥にある住宅及び隣接のえの木邸とほぼ同時期に同じ建築家によって建てられている。山手の西洋館では珍しく、4戸の外国人向け共同住宅であった。正面のベランダとテラスがかつては、吹き放しであったこと以外は、当時の姿をよく伝えている。

❼えの木邸
山手89―6番。昭和2年建築。設計施工は、宮内建築事務所であり、コンパクトにまとめられた建築である。正面に上げ下げ窓、ガラリ戸、暖炉の煙突、ベイウインドウ(張り出し窓)、ポーチなど西洋館の特色を見ることができる。現在は、1階を改装して喫茶店となっており、洋館の内部の雰囲気を味わうこともできる。

❽エリスマン邸
元町公園内。大正15年、日本で長く活躍し、我が国の現代建築の父ともいわれるA.レーモンド(チェコ)の設計であり、居留地建築の伝統様式を受け継ぎながらも、モダニズム・デザインが取り入れられている。もとは山手127番地に建築されたものであるが、取り壊しされることとなり、昭和57年に横浜市が解体調査し、部材の寄付を受けたものである。平成2年、元町公園に復元された。現在は、洋館資料館として公開されている。内部は、応接間・居間を中心に忠実な復元がされ、家具もレーモンドが設計したものを復元展示している。

❾ベーリックホール
山手72番。昭和5年建築。J.H.モーガンの設計による住宅建築で、建主のB.R.ベーリック氏(イギリス)は貿易商であった。現存する洋館のなかでは、最も規模も大きくモーガンの代表作とも言える質の高い建築である。スパニッシュ系のデザインで入り口のポーチなどがまとめられている。また瓦屋根をのせた暖炉の煙突や外観には多彩な装飾がある。



❿横浜雙葉学園
山手83番。現在の校舎は戦災をうけ修復されたものであるが、大正14年M.ヒンデル(スイス)の設計により、建築された校舎を基としている。また、校舎の一角にある尖塔は、山手のランドマークとして山手の尾根筋の至るところから見ることができる。山手カトリック教会(聖堂の尖塔)と横浜山手聖公会の塔と合わせて、「山手三塔」と称されている。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

この他に、東部地区では、山手68番から69番にかけて西洋館がまとまって残っているところがあり、当時の町並を知ることができる。さらに本通りに沿い、多彩な西洋館を見ることもできる。西部地区にも、横浜共立学園本校舎(昭和6年、W.N.ボーリス設計、横浜市指定文化財)を始め貴重なものが数多くある。